

【 復活トロパリ 第7調 】

ハリスト スか み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て しを
 神 爾 十 字 架 死
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く えんをひ
 滅 盗 賊 た め 楽 園 開
 ら き 、 け い こ う ぢよのか な し み を な ぐ さ
 攜 香 女 悲 慰
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界
 使 徒 爾 復 活 世 界
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
 大 憐 賜 傳
 さ せ た ま え り 。
 給

【 日本の聖使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠
 じ つ に し て しんち な る ハリス ト スの え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖
 な る しん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハリス ト スの あ い
 神 撰 笛 愛
 に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こう
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 す、
 せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亜使徒聖 我
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんちのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今 此 教 會 爲 祈

たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活コンダク 第7調 】

いまもいつもよよにアミン。
今 何 時 世 世

しのけんはすでにひとびとをとらうるあた
死 權 已 人 人 捕 能

わず、けだしハリストスはくだりてそのち力
蓋 降 力

からをやぶりてほろぼしたま えり 。 ぢご
 敗 滅 給 地 獄
 くはしばら れ 、 よげんしゃは どうし んによろ
 縛 預 言 者 同 心 喜
 こびてよ ぶ 、 きゆう せいしゅ は しんにおる
 呼 救 世 主 信 居
 もの に あらわれた り 、 しんじゃよ 、 ふく
 者 現 信 者 復
 か つ して い で よ 。
 活 出

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行つる者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 プロキメン 主日第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんちのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

しゅ は その たみにちからをたま い、しゅ は
 主 其 民 力 賜 主

その たみにへいあんのふく をく だ
 其 民 平 安 福 降

さ さん。

誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅ は その たみに ちから を たま い、 しゅ は
主 其 民 力 賜 い、 主

その たみに へい あんの ふ く を く だ
其 民 平 安 福 く 降 だ

さ ん。

誦經) ^{しゅ そのたみ ちから たま} 主は其民に力を賜い、

しゅ は その たみに へい あんの ふ く を く 降
主 其 民 平 安 福 く 降

だ さ ん。

【 使徒經 (アポストロス) 124 端 コリント前書1章10節~18節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ ぜんしよ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい われら しゅ な よ われなんぢら もと なんぢらみない ところ} 兄弟よ、我等の主イイスス・ハリストスの名に由りて、我爾等に求む、爾等皆言う所
^{おな かつなんぢら うち わかれ すなわちなんぢらこころ いつ おもい いつ あいあ} を同じくし、且爾等の中に分争なく、乃爾等心を一にし、意を一にして相合う
^{けだしわ けいてい なんぢら つ かじん われ なんぢら うち あらそい} べし。蓋我が兄弟よ、爾等に就きて、ハロヤの家人より、我に爾等の中に争のあ
^{つ わ い ところ すなわちなんぢらおのおのい われ ぞく} ることを告げられたり。我が言う所は、即爾等各言えるあり、我はパウエルに屬す、
^{われ ぞく われ ぞく われ ぞく あに わか} 我はアポロスに屬す、我はキファに屬す、我はハリストスに屬すと。豈ハリストスは分れ
^{あに なんぢら ため じゅうじか てい そもそもなんぢら な よ} しか、豈パウエルは爾等の爲に十字架に釘せられしか、抑爾等はパウエルの名に藉り
^{せん う かみ かんしゃ われ およ ほか なんぢら うちだれ せん さづ} て洗を受けしか。神に感謝す、我はクリスプ及びガイの外、爾等の中誰にも洗を授け

しことなし、人 ^{ひとあるい} 或 ^{われ} は、我 ^わ は我が名 ^な に藉 ^よ りて授 ^{さづ} けたりと言 ^い わざらん爲 ^{ため} なり。我 ^{われ} 亦 ^{また} ステファン

の家 ^{いえ} に洗 ^{せん} を授 ^{さづ} けたり、此 ^こ の外 ^{ほかなんびと} 何 ^{さづ} 人 ^{いな} に授 ^し けたりや否 ^{けだし} やを知らず。蓋 ^{われ} ハリストスの我 ^{つかわ} を遣

ししは、洗 ^{せん} を授 ^{さづ} けん爲 ^{ため} に非 ^{あら} ず、乃 ^{すなわち} 福 ^{ふく} 音 ^{いん} を傳 ^{つた} えん爲 ^{ため} なり、又 ^{また} 言 ^{ことば} の智 ^ち 慧 ^え を用 ^{もち} いしめず、

ハリストスの十 ^{じゅう} 字 ^{じか} 架 ^{むな} の虚 ^{ため} しくならざらん爲 ^{けだし} なり。蓋 ^{じゅう} 十 ^{じか} 字 ^{ことば} 架 ^{ほろ} の言 ^{もの} は、滅 ^{ため} ぶる者 ^{もの} の爲 ^{ため} に

は愚 ^ぐ なり、我 ^{われ} 等 ^ら 救 ^{すく} わるる者 ^{もの} の爲 ^{ため} には神 ^{かみ} の能 ^{ちから} なり。

(比較用 口語訳)

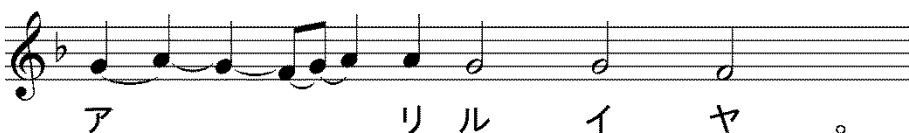
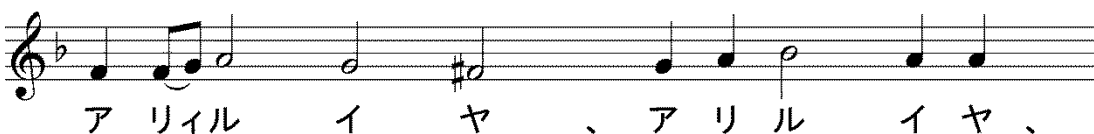
さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにし、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい。わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると聞かされている。はっきり言うと、あなたがたがそれぞれ、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケパに」「わたしはキリストに」と言い合っていることである。キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あなたがたは、パウロの名によってバプテスマを受けたのか。わたしは感謝しているが、クリスポとガイオ以外には、あなたがたのうちのだれにも、バプテスマを授けたことがない。それはあなたがたがわたしの名によってバプテスマを受けたのだと、だれにも言われることのないためである。もっとも、ステパナの家の者たちには、バプテスマを授けたことがある。しかし、そのほかには、だれにも授けた覚えがない。いったい、キリストがわたしをつかわされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を宣べ伝えるためであり、しかも知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 主日第7調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{しじょうしゃ} 至上者よ、^{しゅ さんえい} 主を讚榮し、^{なんぢ な うた び かな} 爾の名に歌うは美なる哉、



誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の} 爾の憐を朝に宣べ、^{なんぢ まこと よ の び かな} 爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい} 人を愛する主 ^{しゅさい} 宰よ、^{わ こころ} 我が心に ^{かみ し} 神を知る ^{ちえ いさぎよ} 智慧の ^{ひかり} 浄き光を ^{かがや} 輝かし、^{わ しねん} 我が思念

^{め ひら} の目を啓きて、^{なんぢ ふくいん おしえ さと} 爾が福音の教を悟らしめ給え、^{たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い} 畏るる畏をも入れて、^{われら ことごと} 我等が悉くの肉體の慾を踏み、^{にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな} を思い且つ行いて、^{ぞくしん せいかつ す} 属神の生活を過ぐるを致させ給え、^{いた たま けだし} 蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう} 爾は我が靈と體との光照なり、^{われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

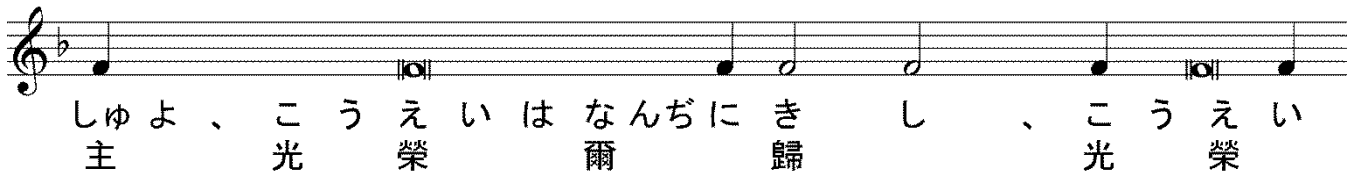
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、^い 今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 58 端 14 章 14~22 節 】

司祭) ^{えいち つつし} 睿智、^{た せいふくいんけい き} 肅みて立て聖福音經を聴くべし、^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス出でて、群衆を見て、之を憫み、其病める者を醫

せり。日暮るるに及びて、門徒彼に就きて曰えり、此は野の處にして、時已に晩し、民

を去らしめよ、彼等が諸村に往きて、己の爲に食を市わん爲なり。然れどもイイス彼

等に謂えり、其往くを要せず、爾等之に食を與えよ。彼等曰く、我等には此に唯五

の餅と二の魚とあるのみ。彼曰えり、之を此に我に攜え來れ。乃民に命じて、草

の上に坐せしめ、五の餅と二の魚とを取りて、天を仰ぎて祝福し、餅を擘きて、之

を門徒に與え、門徒民に與えたり。皆食いて飽き、其餘りたる屑を拾いて、十二の筐

に盈てたり。食いし者は、婦と幼童との外、約五千なりき。イイス直に其門徒

を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、己に先だちて、彼の岸に往か

しめたり。

(比較用 口語訳)

イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をごらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの病人たちをおいやしになった。夕方になったので、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「ここは寂しい所でもあり、もう時もおそくなりました。群衆を解散させ、めいめいで食物を買いに、村々へ行かせてください」。するとイエスは言われた、「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物をやりなさい」。弟子たちは言った、「わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていません」。イエスは言われた、「それをここに持ってきなさい」。そして群衆に命じて、草の上にすわらせ、五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを群衆に与えた。みんなの者は食べて満腹した。パンくずの残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。食べた者は、女と子供とを除いて、おおよそ五千人であった。それからすぐ、イエスは群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ

重連禱に加えるコロナ終息とウクライナの平和の為の祈り

こ まち こ きょうかい およそ まち ぜんせかい えきびょう まんえん まも わ ぜん
此の都邑と此の教會、凡の都邑と全世界とが疫病の蔓延より護られ、我が善に
ひと あい かみ じんじ あいれん た およ われら のぞ いかり とど そのわれら
して人を愛する神が仁慈と哀憐とを垂れて凡そ我等に臨む怒を遏め、其我等に
せま ぎ ばつ われら すく およ われら あわれ ため いの
逼る義なる罰より我等を救い、及び我等を憐むが爲に禱る、

また お たたかい よ そのいのち うしな もの ため しゅわれら かみ あわれみ
又ウクライナに於ける戦に因りて其生命を失いし者の爲、主我等の神が憐
もつ かれら かえり やまい かなしみ おわり いのち ところ やす
を以て彼等を顧み、疾も悲もなくして、終なき生命のある處に安んぜしめ
ため しゅ いの
んが爲に主に禱らん、

また お たたかい よ くるしみ あ きず う うれ あるい うつ もの
又ウクライナに於ける戦に因りて苦に遇い、傷を受け、憂い、或は徙されし者
じれん せいめい へいあん そうけん きうしょく たま ため いの
に慈憐、生命、平安、壮健、救贖を賜わんが爲に禱る、

また たい こうせん とど かしこ わぼく へいあん さか ため なんぢ いの
又ウクライナに対する攻戦を止め、彼處に和睦と平安との榮えんが爲に爾に禱る、
き い あわれ
聆き納れて憐めよ、